使用済田型の収集（３）

日本切手の収集界では、もう半世紀も前から、使用済の「満月消し」に対する人気が続いている。かつては、切手の図案が見えないような消印は、「悪消し」とされて、取引きの対象にもならなかった。それが今では全く事情が変わり、切手の図案など、どうでも良いという傾向になっている。

それなら、白紙に「捨て印」のようなものが、最も尊ばれるのかと言うと、そうではない。とにかく、図案は見えなくても、消印さえハッキリ見えればよい、というのはどうも理解に苦しむ。日本の日付印は、櫛形印に例を取ると、直径が約25mm程度、一方普通切手の幅は、約22mmである。これでは、どんなに正確に押しても、消印の外径は切手の幅の中には、収まらない。

国際展のルールなどを見ると、マルコフィリー（郵便印収集）では、郵便印の印影は完全なものを標準としている。これでは、単片上の切手は減点対象となってしまう。

そこで、切手が田型であると、たいていの消印は、その上に完全印影を示せる。しかも、田型のおかげで、印影が幾つも押されていない限り、図案も楽に鑑賞できる。この理由で、私は使用済をできるだけ、田型で集めることに努めてきた。

その結果の事例を、第１次昭和切手でお目にかける。これらは、いずれも田型の中央に日付印が押された例で、その意味でもアルバムに収めるにも好都合。こういう材料で、シリーズを揃えられれば、鑑賞にも具合がよい。

魚木五夫（日本郵趣協会名誉会員）